

マンガ『BANANA FISH』における男女関係の構造の再解釈

——小説『バナナフィッシュにうってつけの日』と比較する——

オウイケイ 24ZA304

一. はじめに

日本における少女まんがは、明治以降誕生・発展する独特な少女文化から生まれ、戦前の少女雑誌を前身とし、戦後になって既存の芸術伝統を継承する上で、新しい社会環境において積極的に新たな要素を加入し、1970年代に黄金時代を迎えて、独自の美学を醸し出した。それに、数多くの優秀作をはらむとともに、いろいろな文化・美術の分野に影響を与えている。また、日本におけるまんが・アニメをはじめのポップカルチャーの海外進出につれて、少女まんがの影響力は、日本国内に限らず、中国の含む海外にも射程を広げる。

この研究を行う動機について、今日、世界中に「二次元文化」というものの流行に伴い、多くの人々が少女まんがを愛読し、日常生活にも研究する時にも日本漫画の一つの代表的な流れとしての少女まんがに言及する機会が増えている。その過程に、少女まんがにおいて、キャラクター髪や瞳、ストーリーを展開する舞台などによって表現される「西洋」イメージの氾濫を気づいてきた。それで、日本の少女マンガと西洋文化との関係性への問題意識を持って、『BANANA FISH』という作品に注目した。

『BANANA FISH』は、吉田秋生による日本のマンガで、1985年から1994年まで『別冊少女コミック』に連載された少女マンガである。物語は、アメリカの大都会を舞台にして、アッシュ・リンクスという運命と戦う少年を中心に展開します。数十年間に大人気を博して、同名のラジオドラマや舞台劇が次々に現れ、また、吉田秋生の40周年記念の2018年にアニメ化された。

吉田秋生は、『BANANA FISH』の中で素直にアメリカ文学への好みを示している。まず、「BANANA FISH」というタイトルは、もとに J・D・サリンジャーの短編小説『バナナフィッシュにうってつけの日』に出た言葉である。小説の原文によって、「バナナフィッシュ」が主人公シーモア・グラースに虚構されるバナナが入っている穴に泳いでいく謎の魚であり、シーモアがストーリーの終わりに何も予兆もなく突然に自殺したプロットがあるので、死亡に導く魚と解説されるのも可能である。マンガにおける「BANANA FISH」の正体は、物語の流れに沿って、人間の自我意識を完全に破壊する邪悪な薬物だと解明された。また、シーモア・グラースの精神を病んで入院していたが治らないまま退院させられた復員兵という身分も、ある意味で『BANANA FISH』における薬品を開発するためにベトナム戦争の兵士たちを実験体として扱うエピソードと呼応している。もう一部マンガのなかに提起される作品はヘミングウェイの『キリマンジャロの雪』である。小説の冒頭の山頂に横たわっているひからびて凍りついた一頭の豹の死体は、マンガの主人公の変えられない悲劇的な必死の運命と象徴されている。

『BANANA FISH』を読んで、その生き生きとしている世界に沈んでいる同時に、作者吉田秋生の愛読書とマンガ自体の関係性を考え続けていた。その中に最も目立っている問題が、女性の手に作られてほぼ女性の目に読まれる少女マンガとしての『BANANA FISH』は、どのように女性を男性主人公運命の部外者として描かれた小説と妥協し、或いは独特な女性の視点によって書き直すか、また熱狂に外国の異性の間で発生する物語を読む少女たちの目に、一体何を映しているかと、私はそれについて好奇心を持っている。

本文は、マンガ『BANANA FISH』を中心として、小説『バナナフィッシュにうってつけの日』の中の主旨と男女関係を分析する上でマンガに戻り、『BANANA FISH』にお

ける女性に関する表現、及び二人の男性主人公の関係を改めて分析し、現代の男女関係における女性の位置付けへの再解釈を解明したい。

二、『バナナフィッシュにうってつけの日』における男女関係

まず、『バナナフィッシュにうってつけの日』という小説の基本的なストーリーを紹介し、この中に現れる女性意識を分析していく。

『バナナフィッシュにうってつけの日』(A Perfect Day for Bananafish) は 1948 年に発表された J・D・サリンジャーの短編小説であり、サリンジャーの代表作として、彼の作風を色濃く反映している。小説の主人公シーモア・グレースは、精神を病んで入院していたが治らないまま退院させられた復員兵であり、妻ミュリエル・グレースと一緒にフロリダ州の海辺に旅行している。ストーリーは、ミュリエルがホテルで精神の不健全のシーモアと娘とのことを心配している母からかかってきた電話をとる場面から始まる。それに対して、ミュリエルは、母のいらだたしい気持ちを全然気にかけず、シーモアの精神問題に目を逸らし、平気に服装やファッションのことをしゃべっている。場面を変えて、幼女シビル・カーペンターと砂浜の上で仰向けに寝転がっている青年シーモアと出会う。同じホテルに泊まっているので、二人はすでに知り合いになった。シーモアはシビルに虚構される生物「バナナフィッシュ」を捕まえに海に入ると提案し、「バナナフィッシュ」がバナナが入っている穴に泳いでいって、節度がなくバナナを食べて死ぬ魚だと解説する。そのあと、シビルは、一匹のバナナフィッシュを見たという。ホテルの部屋に帰る途中、シーモアはエレベーターに知らない女性と口争いをする。部屋に、シーモアは寝ている妻を見ながら、拳銃で自ら命を絶つ。

そのストーリーにおける重要な女性人物が二人いる：妻ミュリエル・グレースと幼女シビル・カーペンター。その二人の女性の間、顕著な対比性が見られる。

1. ミュリエル・グラス：消費に狂った妻

まずミュリエル・グラスから分析していく。原文によって、妻としてのミュリエルは両面性がある。母の話の通り、ミュリエルは大多数の兵士の妻と違い、再婚しなく戦争が終わるまでずっと生死不明の夫を待っていたとわかる。それに、夫の精神的な異常を全然気にかけず、家族も恐れる夫と平気に旅行する。その視点から見れば、ミュリエルの夫への愛情はまさに感動的なのであろう。しかし、夫シーモア、或いは作者サリンジャーの立場から、そうではないことだと思う。小説の内容によって、シーモアはシビルに妻のミュリエルがどこかと聞かれると、少し蔑みの態度で答えた。「そいつは難問だよ、シビル。いそうなところは何千とあるんだ。美容院かもしれない。毛をミンク色に染めてもらったりして。」¹妻の重い愛情の正反対で、シーモアはミュリエルのことについてそんなに関心を持っていない、それにミュリエルの生活様式を認められる姿勢を示している。シーモアにとって、ミュリエルが自分を陰で支える存在でなく、むしろ自分に圧迫感を与える通俗社会の一部ではないだろうか。学者 Rita Felski は 1995 年に出版された『The Gender of Modernity』の第三章「Imagined Pleasures: The Erotics and Aesthetics of Consumption」で、近代的な消費とその性別的な側面について議論している。Felski は、近代の消費がしばしばエロティックで感覚的な快楽と結びついており、特に女性の消費者像に焦点を当てている。19 世紀後期から、「消費者」というイメージは常に女性の姿で現れる。言い換えれば、消費というカテゴリーが女性性を近代の中心に位置づけたのである。それは、中産階級の女性は、商品の生産ではなく購入に責任を負っているため、社会変化のダイナミズムから外れた位置にいるように見えたが、別の意味では、消費者としての地位が、急速に変化するファッションやライフスタイルを身

¹ J・D・サリンジャー、ナイン・ストーリーズ .P23.

近に感じさせたからである。しかし、19 世紀半ば以降、近代の概念は、非理性である女性性が、新興の消費文化の輝かしい幻想に魅了されるという悲観的なビジョンと結びつくようになる。もはや、近代はより合理的な社会への進歩的な発展と同一視されることはなく、むしろ非合理主義の成長、抑圧された自然が形を成さない欲望という形で再現されることを象徴するようになるという論調がはやっていた。²それで、その女性性＝消費文化＝近代からの合理主義を放棄し、享楽主義を中心とする現代社会という隠喩の筋は、小説の細部に浮かんでいる。

ミュリエルの登場は、いつも大量のファッションや美容などの女性むけの消費に関する要素に伴っている。小説のはじめの場面は、申し込んだ電話を待っていたミュリエルは、「櫛とブラシを洗った。ベージュのスーツのスカートのしみをとった。それからサックスで買ったブラウスのボタンの位置もつけ変えたし、黒子のどこにまたまた生えてきた二本の毛を毛抜きを使って抜きもした。」³電話のベルが鳴る時、彼女も全然慌てなく、悠然に爪のマニキュアをしている。母と通話している間、彼女は何度も自然に話を逸らし、ファッションと服装のことを提起する。ストーリーの結末、部屋の鍵を開けて入ったシーモアは、「仔牛皮の新しいトランク類やマニキュアの除光液の臭いが漂っていた」⁴と感じて、それに妻を見ながら自殺する。

小説を読んで、シーモアも作者もミュリエルの生活様式や、ミュリエルが象徴している消費社会に対して消極的な態度を持っていることがわかる。前文通り、主人公シーモアは妻の生活様式を納得できない姿勢を示している。シーモアがいない場合、ミュリエルと母の対話によって、ミュリエルとシーモアは内心がすでに離れているヒントも見え

² Rita Felski. *The Gender of Modernity*. P 61－62.

³ J・D・サリンジャー. *ナイン・ストーリーズ*. P10.

⁴ J・D・サリンジャー. *ナイン・ストーリーズ*. P32.

る。ミュリエルは、シーモアに「1948 年度のミス精神的ルンペン」⁵というニックネームをつけられたと述べる。シーモアから見れば、ファッションや美容のことを考えてばかりいるミュリエルが、浅薄な物質的享樂を追い求め、精神を持っていない醜い人間である。それに呼応している内容は、次のドイツの詩の本についての会話である。ミュリエルは、「彼の話だと、あの詩を書いたのは今世紀唯一の大詩人なんですって。何なら翻訳を買うとかなんとかして読んだらいいじゃないかって、そういうのよ。ドイツ語の習ったって言い訳だしって」⁶と母に話した。しかし、ミュリエルは、ドイツ語を勉強したりその本を読んだりするつもりがなく、甚だしくはその本を実家に落ちているままに出かけた。その詩の本は、ある程度でシーモアの独特な心の内面を象徴している。しかし、ミュリエルはシーモアの深刻な精神的苦悩に気づかず、シーモアの内面に触れる知性を持っていない、真のシーモアを理解するつもりもない。シーモアの目に映っている妻のミュリエルは、彼が憎んでいる節度のない欲望が膨らむ現代社会の住民である。その非合理主義に墮し、膨大な欲望に駆使されて感官の享樂を尽くす人々は、シーモアが語るバナナフィッシュの原型になる。

2. シビル・カーペンター：性別の境界線を越えた少女

次にもう一人の女性人物のシビルについて分析していく。シビルは、シーモアとともにホテルのビーチで過ごしている少女で、物語の中でシーモアと親しくなる。シビルは、一緒に暮らしていてもお互いに理解できないミュリエルと違い、シーモアと偶然に出会った彼女が少女ならではの無邪気さでシーモアの心を和ませる。二人は、年齢も社会地位も生活経験も全く異なる別の世界の人間であっても、一緒にいる時素直に自分の考え

⁵ J・D・サリンジャー. ナイン・ストーリーズ .P13.

⁶ J・D・サリンジャー. ナイン・ストーリーズ .P14.

と気持ちを口に出せる。シーモアは自分の精神的な苦悩を「バナナフィッシュ」の物語の形でシビルに打ち明けた。それを聞いたシビルは、他の人のようにそれを狂人のでたらめな話と見なさず、シーモアに「あんた、『ちびくろサンボ』読んだ？」と聞いた。⁷

『ちびくろサンボ』はこのようなストーリーを語っている：サンボという男の子が4匹のトラに服や持ち物を奪われる。その後、トラたちは互いに争い合い、木の周りを走り回っており、最後に溶けてバターになってしまう。その貪欲や過剰な欲望が最終的に自分自身を傷つけ、破滅に導くという主旨は、確かにバナナフィッシュの隠喩と共通しており、シビルがシーモアの内面に触れた証になる。

この部分は、J・D・サリンジャーの短編小説『バナナフィッシュにうってつけの日』における女性像を分析した。主人公シーモア・グラスは第二次世界大戦の戦争経験を持つ元兵士で、精神的に傷を負っており、その影響で現実世界にうまく適応できない状態にある。ストーリーの中、重要な女性人物が二人いる：妻ミュリエル・グラスと幼女シビル・カーペンター。その二人の女性の間、顕著な対比性が見られる。ミュリエルはシーモアの深刻な精神的苦悩に気づかず、ファッションや美容のことに夢中して、膨大な欲望に駆使されて感官の享楽を尽くして、シーモアを傷つけた現代社会の住民の代表であり、バナナフィッシュたちの一員である。それに対して、幼女であり、完全な女性にまだなっていないシビルは、幼女ならではのシーモアの心を和ませ、シーモアが率直に接する唯一の対象になる。彼女は甚だしくバナナフィッシュの隠喩によってある程度でシーモアの精神的な苦悩を理解し、人々に狂人とみなされるシーモアの内面に触れるようになる。

サリンジャーは、その小説の中で、複数の鮮明な対立の構造を作った：①現代社会—

⁷ J・D・サリンジャー、ナイン・ストーリーズ .P27.

—個人の精神②現代社会の住民としての女性——現代社会に放逐された男性③大人の女性——まだ完全な女性になっていなく、「中性」の少女。その中、①が常に②の形で、つまり男女関係の中における対立として表現される。

次の部分は、以上の結論に基づき、少女マンガ『Banana Fish』の内容によって類似の対立構造を探しながら、その構造に対するリライトを考察する。

三. 『BANANA FISH』における関係性の継承と反発

『BANANA FISH』の物語は、1980年代のニューヨークを舞台にしており、若いギャングのリーダーのアッシュ・リンクスを中心として展開する。物語は、アッシュが「バナナフィッシュ」という謎の言葉を知り、それに関連する事件に巻き込まれていくところから始まる。アッシュはあるインタビューをきっかけに、日本から来た少年奥村英二と出会った。英二は自分の優しさと誠実さで、閉鎖されたアッシュの心に触れた。まるで別の世界の住民である二人は、次第に深い絆で結ばれていく。「バナナフィッシュ」は、密売されている謎の薬品であり、それに関わる陰謀の鍵となる言葉である。アッシュと英二は、「バナナフィッシュ」の背後に隠された真実を解き明かすために、力を合わせて闇に潜む危険な人物や組織と戦っている。特に、その物語は、ギャングやドラッグ、政治、戦争などの要素を加入し、犯罪と裏社会の世界をある程度で写實的に描きながら展開しており、登場人物の中に男性のキャラが圧倒的多数を占める。本章は、キャラジェシカ・ランディとマックス・ロボ、また主人公アッシュ・リンクスと奥村英二の関係を中心として考察する。

1. ジェシカ・ランディ：夫に帰順した「陽具型女性」

今日の視角から見れば、キャラの対話において女性に対する差別的言説が時々に見れるが、本文はそれを詳細に統計して考察するつもりがなく、まず具体的な女性人物ジェ

シカ・ランディに絞って、彼女と元夫マックス・ロボの関係を中心として分析していく。

ジェシカ・ランディを選ぶ理由について、彼女は、この男性のキャラが圧倒的多数を占めるストーリーにおいて、他の「読後即廃棄」の女性キャラに比べて、より多くのストーリーに関わり、より完全な個人的ストーリーを持ち、それに物語の最後まで生き残る。

ジェシカ・ランディの初登場はマンガの第 4 巻である。主役たちはマフィア組織の追跡を避け、事件の真相を調査するためにカリフォルニア州に向かい、そこで主役たちの一員のマックス・ロボの元妻であるジェシカを訪ねた。彼女は、非常に魅力的でお洒落な女であり、女性向けの雑誌社に記者とし勤めている。彼女は、雑誌のモデルとして働いた時カメラマンのマックスに出会い、そのあとマックスと恋に落ちて結婚したが、マックスと離婚した際、子どもの監護権を巡っていくつかの争いがあった。そのため、久しぶりにマックスと再会した際、彼が自分の息子連れて行くのではないかと心配し、マックスに銃を突きつけた。誤解が解けた後、マックスたちはジェシカの宅に入って、ジェシカに招待された。しかし、彼らはジェシカに自分がやっていることについて一言も言わなかった。マックスたちが離れた後、彼らを追跡した敵の組織の男たちは、ジェシカの家に侵入し、ジェシカを強姦した。幸いに、ジェシカが電話をかかえている時に襲われるので、通話している相手が異常に気づき、警察を呼んだ。警察に救われたジェシカはひどい有様で、ジェシカのことを聞いて戻ってきたマックスと出会った。ジェシカはマックスに怒ったり泣いたりして、最後に「怖かった」と言いながらマックスと抱きしめてキスをした。そのように、二人は復縁した。後のストーリーに、ジェシカはマックスとともに、アッシュの力になってバナナフィッシュを追う。

小説『バナナフィッシュにうってつけの日』と似ており、以上で述べたエピソードを

読んで、いくつかの対立構造が見られる。まずはジェシカがいる世界とマックスがいる世界の対立である。マックスは元アメリカ陸軍の兵士で、ベトナム戦場に出た。アメリカに帰った後、ニューヨーク市警の警官になって、ジャーナリストのふりをしている。主人公アッシュの兄の戦友であり、アッシュとともにバナナフィッシュについて調査している。ストーリーによって、マックスは、世界の裏側の闇を見て、一生懸命に真実を追求し、邪悪な陰謀を破るように戦っている男である。それに対して、ジェシカは雑誌記者で、女性向けの雑誌社に勤めながら、独自に息子を育てている。仕事に強い熱心を持って、英二に初めて会う時、格好がいいと思って雑誌もモデルになると誘った。つまり、ジェシカはマックスと違って、明るくて闇と穢れが見られない世界に生きる人間である。彼女から見れば、ずっと自分の知らない物事に精力を注いでいるマックスが無責任である。その対立を基づき、二人に関するストーリーが展開する。

しかし、ジェシカとマックスの関係は、シーモアとミュリエルのように破滅しない。

『Banana Fish』で、ある事件をきっかけに、ジェシカとマックスはお互いに理解し始めた。その事件は、敵の組織の男たちは、ジェシカの家に入侵し、ジェシカを強姦したことである。マンガの表現によって、警察に救われたばかりのジェシカは、いつものように落ち着く様子をしていた。情報を取って戻ったマックスと会うと、怒りに満ちており、彼の頬を平手で打った。ジェシカは、犯罪者の男への怒りと恨みをマックスに向けて発散して、それにマックスのいつもの無責任に対する不満をもらした。これを聞いたマックスは、ジェシカをしっかりと抱きしめて何度も謝り、ジェシカの許しを請った。ジェシカはついに何も隠さず、マックスの腕の中で声を上げて泣いた。二人はキスをして復縁した画面でこのエピソードが終わる。その事件をきっかけに、ジェシカはマックスの世界を理解し、マックスの力になる。言い換えると、そのストーリーでジェシカとマッ

クスは悲劇の別れの運命に導いていなく、性別が異なっても同じ世界を共有するようになる。

しかし、強姦は、一般的に女性に実施する精神・肉体共に大きな傷を与える犯罪行為である。なぜストーリーの中でそれを復縁するきっかけになるか。もし作者は単純に被害をきっかけに、ジェシカに裏側の世界を見せたいなら、強姦でなく他の身体や精神を傷つける場面を示してもストーリーの展開に同じ効果を与える。次はその問題について分析したい。

ジェシカは、力強くて、支配的な性格を持つ女性である。彼女は、自分の仕事に熱意を持って、自立な社会人として、男性が要らず、自力で息子を育ちいい生活を作る。フロイト主義や精神分析学に基づき、性別や性欲、力の象徴としての陽具を持つとされる女性は「陽具型女性」(phallus-like woman) という。ストーリーによって、ジェシカは、まさに女性であっても、男性が要らず男性に負けない陽具型女性である。しかし、その判断を下す基礎は、男性と女性の根本的な対立があるということである。「陽具型女性」は自然状態の女性ではなく、典型的な女性の役割に立っていないイメージを与える。その筋に沿って、「陽具型女性」を「正常」、或いは男性とともにいる時により「調和」的な状態に戻る方法は、その女性に自分の男性と異なり、女性の身体が持ってきた女性ならではの「女性性」を意識させて、すなわち心理の「去勢」である。『Banana Fish』ストーリーで、ジェシカの「去勢」は強姦の形で示されている。強姦という行為は、大部分の場合に女性を被害者として、直接に女性の性器官を傷つけて、また女性の貞操を重視する社会で女性に世論の圧力を与える。それで、ストーリーの中のジェシカは、女性にとって極端に悲惨な遭遇で自分の「女性性」を意識させて、男性に守られない女性としての弱さを深く感じられた。ジェシカは、そのような不安定な心理状態で元夫のマッ

クスと会って、自分に比べてより強いと思う男性に帰順し、あらためて自分を男性という概念に対応する「女性」に位置付け、マックスの妻になった。つまり、ジェシカとマックスの世界観と理念の調和は、女性であるジェシカが苦難に耐えて、一部のエゴを捨てることを代償とする結果である。もし作者はジェシカとマックスのストーリーを通じて、小説『バナナフィッシュにうってつけの日』と異なる別の男女関係の可能性を示したいなら、確かにいい結果であるが、その結果に導くために、女性のほうは過酷な代償を払った。

2. 奥村英二：癒しをもたらす「雌雄同体」の少年

しかし、『Banana Fish』は、ジェシカとマックスに止まらず、別々の世界観を持つ二人の間にあるもう一つの関係の可能性を示している。それは、主人公アッシュと日本から来た少年奥村英二との関係である。

今日の社会で、多くの人々が性別に関するステレオタイプを破るために努力しているが、ジェンダースキーマに関する観念はまだ影響力を持っている。作者はマンガの中で、二人の攻めや受けという位置を付けていないが、二人の少年は異なる性別気質を表現していると見られる。アッシュは、マフィアのボスで育てられた少年であり、非常に高い知能と優れた戦闘能力を持つ冷徹な人物である。それに対して、英二は、日本からアメリカに来た若者で、アッシュと出会い、彼の周囲の事件に巻き込まれた。英二は非常に優しく、純粋で、無垢な性格をしており、アッシュと対照的に、暴力やギャングの世界に馴染みがなく、どちらかと言うと文学や写真に興味がある平和的な人物である。英二はアッシュの苦しみを理解し、彼と心の距離を縮めていく。また、英二の無邪気さや優しさが、アッシュにとっては大きな支えとなる。そのストーリーで、アッシュの性格には「競争的」「自己主張が強い」「独立している」など、社会的に男性に関連づけられる

特性が含まれている一方、英二の性格には「優しさ」「共感力がある」「温かい」といった、女性に関連づけられる特性が含まれているとみられる。つまり、生理的な男性であるが、「女性的」なイメージを与える人物である。それで、男性同士であるアッシュと英二の間で、シーモアとミュリエルの同じように、世界観の違いに基づく対立構造が成立する。しかし、完全な女性にまだなっていないシビルと同じように、英二は真の意味の女性ではなく、言い換えると「雌雄同体」の性質を持っているということである。また、英二は少年の姿をしているが、実はすでに成年したという。英二というキャラが男性と女性、子供と大人の境の辺りを彷徨っている曖昧さは、このストーリーに小説に従わずに再解釈の余地を与える。

物語を通して、性格と世界観の違っている二人は、とても深い絆を築いた。最初は英二がアッシュの冷酷さやギャングの世界に驚き、恐れる場面も多いが、次第にお互いにとってかけがえのない存在となっていく。アッシュは最初、英二に対して無関心だったり、時には冷たい態度を取ったりするが、英二の純粋さや真摯さに触れることで、次第に心を開き始める。英二はアッシュにとって、唯一心を許せる存在となり、彼の過酷な運命に立ち向かう力を与える役割を果たす。ストーリーによって、性格や世界観の違いは、彼らの関係の障害にはならなかった。ストーリーの終わりで、悪勢力との対決に勝ったアッシュは、日本に帰る英二とまた会おうと約束する。

しかし、それは真の結末ではない。一人でいるアッシュは前の知り合いに襲われて、ナイフに刺されて重傷した。彼は、他人に助けを求めなく、救急車も呼ばずに一人で静かに失血で死んだ。まるで自殺である。その自殺のエピソードは、確かに小説『バナナフィッシュにうってつけの日』と『キリマンジャロの雪』の終わりに模倣している可能性があるが、実際には、過度に理想化された二人の関係に対する悲観的な予測を表して

おり、作者自身も自分が描いた理想的な関係を完全には信じていないことを暗示していると推測する。

この章節の内容をまとめる。前章の結論に基づき、本章はマンガ『Banana Fish』におけるジェシカとマックス、アッシュと英二の二つの人物関係を分析した。『Banana Fish』は、『バナナフィッシュにうってつけの日』と異なる新しい関係の可能性を示した。ジェシカとマックスは悲劇の別れの運命に導いていなく、性別が異なっても同じ世界を共有するようになる。しかし、その結果に導くために、女性のほうは過酷な代償を払った。また、英二が男性と女性、子供と大人の境の辺りを彷徨っている曖昧さは、このストーリーに小説に従わずに再解釈の余地を与える。性格や世界観の違いは、アッシュと英二の関係の障害にはならなかった。だが、ストーリーの終わりでアッシュの自殺は、ある意味で、作者自身も自分が描いた理想的な関係を完全には信じていないことを暗示している。

四. おわりに

マンガ『Banana Fish』は、小説『バナナフィッシュにうってつけの日』が示す関係性の構造を継承する上で再解釈を行い、小説の悲惨な結末と異なるいい結果に導く方法を提出する。しかし、ストーリーの中で男女関係を扱う際、作者は依然として伝統的な男女関係の枠組みを脱却できていないことが見て取れる。少年同士の関係については、より大胆な想像がなされているものの、その理想化された関係に対する悲観的な態度を取って、物語の結末で自殺というプロットでそれを否定する。作者は伝統的な男女関係の物語構造を突破し、新しい理想的な関係の形を提案しようとしているが、保守的な思想に縛られていることが見て取れる。だが、たとえ成功とは言えない試みであっても、あ

る意味で伝統的な性別観念に衝撃を与え、当時の性別制度に対する女性たちの反省と批判を反映しており、後の世代の少女たちに束縛を打破し、過去とは異なる生き方を選び、より健康的な人間関係を築くように促している。

参考文献:

- [1] 吉田秋生. Banana Fish (1-19 巻) [M]. 謝怡荅訳. 東販. 2004.
- [2] J・D・サリンジャー. ナイン・ストーリーズ [M]. 野崎孝訳. 新潮文庫. 1974.
- [3] ヘミングウェイ. 誰がために鐘は鳴る キリマンジャロの雪/他 [M]. 大久保康雄訳. 河出書房. 1969.
- [4] Rita Felski. The Gender of Modernity [M]. Harvard University Press Cambridge, Massachusetts London, England. 1995.
- [5] 米澤嘉博. 戦後少女マンガ史 [M]. 筑摩書房. 1980.
- [6] 菅 聡子 (編集). 〈少女マンガ〉ワンダーランド [M]. 明治書院. 2012.
- [7] 宁可. 中国耽美小说中的男性同社会关系与男性气质 [D]. 南开大学. 2014.
- [8] 刘含嫣. 对话艺术下的香蕉鱼隐喻：西摩的死亡之谜 [J]. 今古文创, 2024, (25): 28-33. DOI: 10.20024/j.cnki.CN42-1911/I.2024.25.009.
- [9] 杨伟. 日本少女漫画中的女性主义想像——以性别越界和少年爱作品为中心 [J]. 日语学习与研究, 2016, (03): 35-42. DOI: 10.13508/j.cnki.jsr.2016.03.006.